

大阪府支援教育研究会 2016年度 冬季研修会

2017年1月28日 たかつガーデン

今年の冬季研修会は、午前午後で4分科会を行いました。多くの方に参加していただき、有意義な研修とすることができました。講師の皆様、参加された方、どうも有り難うございました。早くに定員が充足したため参加できない方が多かったことお詫び申し上げます。

A ソーシャルスキルトレーニングを活用しよう

早野 眞美 教頭先生、川口喜志子 先生、下野広文 先生、植野 耕司 先生
(大阪府立箕面支援学校)



まず、人間関係づくりのトレーニングについて、次のようにひととおり順番に説明していただきました。わかっていたことも再整理できました。

ソーシャルスキルトレーニング (SST) とは、ソーシャルスキル (社会技能) を身につけるための訓練。人とうまく関わっていくための方法。

アサーショントレーニングとは、自分も相手も大切にしたい自己表現を身につけていく方法。

ライフスキルトレーニングは、日常生活をおくるために必要なスキルを身につけるトレーニングで、特に発達障がいの子供・児童に有効である。

構成的グループエンカウンターとは、リーダーが実施するエクササイズ、時間、参加人数など約束事を決めて心と心のふれあいを体験すること。

アンガーマネジメントとは、衝動的な怒りの感情やいらだちをうまくコントロールするための心理教育プログラム。

次にソーシャルスキルトレーニングの具体的な内容について順に説明いただきました。ソーシャルストーリー、絵に描いたり文字にしたりして伝える方法、絵カードを使ったSSTなど。

また、アサーショントレーニングでは、ジャイアン的コミュニケーションのやり方・のびた的コミュニケーションのやり方・しずかちゃんのコミュニケーションのやり方を、いろんな学校の先生が代わり代わりに演じることで学習しました。

後半は、実際にグループ (6人組みを8班) をつくり、2人組で自己紹介、さらに他己紹介、グループ内で共通するものを探したりしました。(構成的グループエンカウンター)

さらに、実際の場面を想定したSST演習を班で考え、最後に演じたりしました。

あっという間の時間が過ぎ、皆さん満足した講義になりました。

B 子どもの実態把握について考える ～WISC-Ⅳの検査結果を支援に活かすために～

富田 淳 先生（大阪府立東住吉支援学校）

今回は WISC-Ⅳの検査内容はこのようなものです、というような説明ではなく、検査結果をどのように支援に活かしていくかということをお話していただきました。

心理検査は、検査を受ける者の相談内容がまずあり、その答えを得るために実施することに目的があります。単に診断名を付けることではなく、治療や改善といった支援介入や環境調整の為の手がかりを得るためのものです。日頃の行動観察と検査結果とを照らし合わせて、よりよい生活に向けて考えていくものです。

全体検査 IQ (FSIQ)、言語理解指標 (VCI)、知覚推理指標 (PRI)、ワーキングメモリー指標 (WMI)、処理速度指標 (PSI) の5つの合成得点の結果により、子どものわかりにくさや、処理のしにくさが分かれば、大人の理解や対応、教材の指導方法、座席位置などの工夫をする手だてにつながります。

具体的な事例を提示していただき、分かりやすく説明して下さることで、実態把握の重要性についてあらためて認識させられました。検査の結果を知り、それを実際に具体的な支援にどう結び付けるか、理解を深められる学びができました。

最後は全員で、「むすんでひらいて」の「て」を歌わないにチャレンジしました。意外と難しく最初は間違えてしまう人が多かったのですが、歌詞が画面に出て、次に「て」の部分が色で付けられると間違えにくくなりました。視覚情報があるのとないのとではかなり違うということを感じることができました。

これから、もっといろんな事例を知りたい、もっと詳しく学びたい、という思いをいただいた講座でした。



C ビジョントレーニング ～見ることは分かること～

榎場 政晴 先生 (大阪府立茨木支援学校)



まず、最初に、視機能のチェックリストを紹介していただきました。子どもたちの様子をチェックすることで、視機能の課題が、入力や情報処理・出力のどこにあるかがわかります。特に視機能の情報処理については、頭の中でイメージすることがいかに大切かを知りました。

次に、教材を体験しました。竹串とビーズを組み合わせたグッズで、「注視」と「追視」「跳躍視」の練習の仕方や実施するときのコツを教えてくださいました。実際に二人一組になって行くと、やり方がよくわかりました。そのあと、子どもが追視

や跳躍視を行っている映像を見ました。跳躍視を目的にした教材「絵カード探し」に挑戦していました。練習を重ねると、かなりスムーズに跳躍視することができるようになるのだということがわかりました。

最後に、榎場先生が前日に夜なべして作成したというジオボードの体験をさせていただきました。提示用は、透けなくて見やすい白いベニヤ板、子ども用は、透明の亚克力板になっています。透明なのは提示用のジオボードや見本のプリントを重ねた時に見やすいからです。榎場先生曰く、「プリントで点つなぎをするのと比べるとジオボードを併用した場合、学習効率が格段高くなる」とのことでした。手と指を实际使うことが大切なのだろうとのこと。このジオボードの練習をすることによってひらがなの拗音や漢字を書字するときのマス使い方が改善された様子や、また、見本を見てジオボード上に正しく形が作れるようになっていくにつれ、その子の描く絵が質的に変化していく様子を見せていただきました。

子どものことをよく見て、どこにつまずきがあるのかを知り、その子に応じた教材や課題を用意し、練習を続けていくことの大切さを改めて感じました。榎場先生の教材作りへの熱意を大いに感じ、見習わなければならないと強く思いました。

研修が始まる前から、「時間が惜しいから」と映像も流していただきました。まだまだ、先生のお話をきかせて頂いたり、教材を体験させて頂いたりしたかったです。時間が足りないと感じた、密度の濃い非常に有意義な時間でした。ありがとうございました。

D 研究部担当 各地区からの実践報告

すべての子どもたちにわかりやすい算数を

—村上タイルを使った〈なんとなくわかる〉からはじめる算数—

坪郷 正徳 先生（大阪狭山市立第七小学校）

『すべての子どもたちに』坪郷先生のそんな熱い思いがたくさん詰まった2時間でした。すべての子どもたちにとって算数を学ぶ意味とはなにかというお話から、日々の実践をもとに有効な指導方法やそのための教材について、製作も含めて詳しくお話頂きました。

計算の学習をする際、指を使ってなんとか答えを導きだそうとする子どもの姿をよく見かけます。数を「数えられる」が「数がわかる」ことが難しい。そのような子どもたちに、いかに数量イメージをつけさせていけばよいのでしょうか。坪郷先生が実践を進められている村上タイルをご紹介します。



村上タイルの特徴

- ・同系色の2色で作られているので、一見で数量の判断がしやすい（数えない）
- ・補数が目に見える
- ・かたまりを意識できる

タイルを見て読む練習をくり返し、話しながらタイルをとって計算問題に取り組むことで、数量に触れて慣れる機会を増やし、数量感覚を育てていく。積み重ねることでイメージをもって計算できるようになる。イメージを手がかりに「なんとなくわかっていく」指導をめざしていく。

タイルの制作後も、制作したタイルの使用方法やWeb版の紹介、計算の型分けや補助記号のかかせ方などについても詳しく説明して下さいました。

また、講座終了後にもタイルの使い方を詳しく聞きに来られた先生や、数量の指導についてもっと詳しく教えてほしいという先生方に対して大変丁寧に、熱く応えて頂きました。

教材を教えて頂いただけでなく、参加した先生たちも元気をもらい、日々の実践への勇気をもてるような充実した時間となりました。